

令和3年12月



スクールカウンセラー 中野隆治



「除夜の鐘」



なかはらちゅうや

おおみそか

新年が近くになると決まったように思い出す詩句があります。中原中也という詩人の大晦日を歌ったこんな詩です。

除夜の鐘は暗い遠い空で鳴る。

千万年も、古びた夜の空気を^{ふる}顫わし、

除夜の鐘は暗い遠い空で鳴る。

.....

その時子供は父母の膝下で蕎麦^{しっか そば}を食うべ。

その時銀座はいっぱいの人出、その時浅草もいっぱいの人出。

その時子供は父母の膝下で蕎麦を食うべ。

.....

（中原中也「除夜の鐘」）

12月31日という1年の終わりの日を、日本人は特別な思いを抱いて過ごしてきました。自分の過ごしてきたこの1年を特別な意味と感傷で迎え、向き合おうとしたのでした。たとえば、人間の持っている百八つある^{ほんのう}煩悩(悩みや苦しみの原因)を取り払うという除夜の鐘の音を聞くことで、たとえば、目まぐるしかった1年を振り返りながら、年越しそばを食べることで。全てが、新しい年への自分ながらの意気込みと考えたのでしょう、それは、親と共にそばを食べる子供達も同じでした。除夜の百八つの鐘の音を聞きながら、この1年の後悔に思いを寄せ、新しい年への希望を思ったのです。

12月31日という日には、日本人の、その風土や文化に根ざす独特の思いがありました。中原中也の詩からは、その微妙な大晦日の様子が、感傷的でどこか懐かしい表現で迫ってきます。除夜の鐘が、「暗い遠い」空で鳴るのです。「遠い」という表現に、除夜の鐘の神秘的な音が聞こえてきそうな気がします。また、子供達はそばを「食うべ」るのです。年越しそばを食べている時の子供達の神妙な動作が思い浮かべられるようです。

やがて来る新年に^{いた}思いを致し、人々はこの大晦日の一日だけは、特別な感傷を抱きつつ、時間を過ごすことになります。都会の雑踏の中で、1年を振り返る人もいるはずですが。新年のカウントダウンが始まるのを期待しながら、銀座や浅草の街をとめどなく歩く人達です。そして、新年。どんな年になるか誰にも分からず、ただ、どんな年にしたいかはそれぞれの心に秘めながら、除夜の鐘が鳴り終わるのを待つのです。新しい年の平穏と飛躍を願いながら。